

第七席 本願一實の大道

十一
十八通
入へば
八願に
ぬ這願

一 眞宗では三願轉入といつて十九願から二十願、二十願から第十八願に這入るので、一遍に十八願には這入れぬことになつて居る。十九願の宿善の人は十九願で一代果てゝしまふ、二十願の宿善の人は二十願で一代果てゝしまふ、餘程宿善の深い人でなければ十八願に入る事は出来ぬ事になつて居る。

之は私がいふのでない、御開山が化土の卷の一番初めに、自分の信仰の経路をお書きになつて、私は初め雙樹林下の往生を願つた、之は第十九願、次に難

思往生の二十の願まで這入つたが、今日はとうとう第十八願難思議往生に這入つた、果遂の誓ゆるあるかな、一度はくくの誓願がとうく私の此のおぞい胸に至りどいて下さつた、とお話しになつて居る。こゝをよう確かにして置かんと非常に間違うて来る。聽聞の仕様が悪いと十八願聞き乍ら十九、二十で一代果ててしまふ人が多い。

要門自
力の機

二 眞宗には名目はないけれども、宿善といふ事について鎮西に於ては、汎爾の宿善、係念の宿善といふものがある、といふ。それが十九願に這入る模様となつて居る。汎爾、係念といふのはバツとした宿善初めの間は後生大事で參るのでも何でも無い、一寸參んなさいと勧められて參つた、丁度ひまがあるからごんな風か行つて見ようといふので參つたのが汎爾の人、一度參ると南無阿彌陀佛といはん譯にいかん、南無阿彌陀佛とやるだらう、それがもとなつて段々く參るにしたがつて係念の人となる。俺も御信心貫はうかと御淨土に念ひを係ける。初め

何とも思はなかつたものが段々く聽聞して居るうちに念ひを係けて、俺も御信心貫つてお淨土へ參らせて貰はなければならん、とそれから御信心貫ひに骨折る、これでも一年や二年で無い五年も十年もこゝに止まつて居らなければならぬ。其の信心は何かといふと十九願の信心、お助けに夜明けし、參らさにやおかんの慈悲を當力にせよと聞くだらう、そこでお前さん此の地獄より行場の無い此の奴を今命終つても淨土へやつて下さる、それで一寸御信心貫うて御坐ります。所が段々く聽聞するに従つて、此の機のまゝ參らせて貰ふ、此の彌陀を當力にする、頼む道理や譯はよくわかつた、そこで此の汎爾、係念の宿善によつて初めて十九願の要門に這入る、御信心も貫つた、疑も晴れた、彌陀もたのんだ、阿彌陀様一佛になつた、御化導聞いて見るとよく合ふは、何を聞いても皆自分の胸によく合ふものだから、すつかり御淨土へ參つたつもりになつてしまふ。そこで十九願の御信心を貫つた人は、これで墮しはなさらん墮らはせんと自分できめ

信心貫
うて御
座ります

る。彌陀をたのめば必ず助けるといふ證據が六字の約束、私は助けてお呉れるに間違ひないと夜明した、信心も貫ひ、彌陀もたのんだから、もう大丈夫、たのむ者を助ける信するものを助けるといふ六字の約束だからもう墮ちられん、墮ちません、と凡夫様が自分でできる。所がさうきめて居つても宿善のあつて人はそこに居られん。何故居られんかといふと、御化導聽聞してそれには一寸も不足はないが、今夜でも行かんならんと自分の胸にあたつて見ると、ア、エーナーといはん、何やらつかまへ所も何にもないやうな氣がする。そこでそれは自分で勘考せんならん、うまい事をやるは、これはいかん、今行かんならんと思ふと何にもない、之は凡夫ぢやで煩惱に眼障へられてと仰つしやるのはこの事ぢやらう。煩惱に眼障へられて居るから見える道理、解らう道理は無い。凡夫はいつまでもどうもならん機どきめる。

お前さん、物忘れをせん人ばかりよつて来て居るから何返も話をせんと解らぬ。つかまへ所が無いけれども、これは凡夫ぢやで、どうもなる機ぢや無い、ナムンダブツノ、お淨土參りに疑晴れた夜明した、信心貫うた彌陀たのんだ、墮ちはなさらぬ墮ちはせん、自分でお出でなさる積り、うまい事を考へて居るは、それが十九願の機。これでどうく一代果てる人も澤山ある。之を要門の自力と稱へて居る、觀無量壽經の機である。

三 所が宿善の厚い人はこれから二十願に這入る。宿善の厚い人は、之は凡夫ともなれん奴、煩惱に眼障へられて居るからとやつても、後生は大事未來は大事と思ふ程、確かにない奴一つが邪魔になつて、こゝに云ふに言はれん所が出て来る。そこで此の名前の事を、何となう、こゝこゝとなうと御同行さんは仰つしやる。所がお前さんこのうちに、利口さうな偉相な友同行があつて「それはあかん」、「いゝが、いゝぢやせん」、「それは我機を眺めるからいかん、我機相手になるからいかん、それでは萬劫たつても夜明けは出來ぬ」、「どうしませう」、「阿彌陀様のお手

自分
勘考
せ
ら
ん

眞門
自
力
の
機

聞いた
時だけ
御尤

許の丈夫な所ところに目をつけねばいかん」うまい事を聞いたと思ふだらうまあこれで安心して家へ歸る、歸つて夜寝て居る、フト目が開いた、今日はよい事を聞いた、併し、今夜でも出かけて、と又やる。アツいかんナンマングブ〜、また初める。聞いた時だけ御尤もだと思ひ、家へ歸つて見て、後生は大事、今夜でも行かんならんが靈大丈夫か、アツ又出た、あつちへ行け〜思つてはいかんナンマングブ〜、此の時の念佛のはやさ。御同行の經路を見ると必ずかういふ風にする。此の道を通らん事には向ふへ行けん事になつて居る。

そこでごうなるかといふと、お前さん、我機眺めてはいかん、私の機の方は間違ひ通しなれども、向ふに間違さんお慈悲がましますで、ナア阿彌陀さん、ソイツと佛壇の下から顔を出して、此方は墮ちる奴なれども墮さんお慈悲がましますでナア阿彌陀さん、阿彌陀様によし〜と云つて貰ひたい氣がする、これが二十願、こゝに居る間が難思往生の願。難しい所ちやネー。之を若存若亡といふ。

わが機眺めりや不定、法の手許眺めりや一定、向ふ眺めりや大丈夫、我が機眺めりやフラ〜、此の二十願まで来た人は餘程進んだ人で、大略十九願で一代終る人が多し。二十願まで来た人を他の人が見れば、あの人こそ喜び手と思はれる、私がかういふ迄もなく、あなた方京都の街にお出でになつて、而も御本山のお膝元で、あの人こそは御淨土に參り損ひはないといふ人を何人知つて居る、一つ指を折つて見て貰ひたい。マア自分だけは親指を折つて置け、自分を除いて、御淨土へ參れる人が何人ある、三本の指が折れるか、五本の指所ところで無い、三本の指も折れまいと思ふ。こんな事をいふと、あの坊主、妙な事をいふと思ふだらう、けれども、私がいふのでない、釋迦如來が仰しやる、難中之難無過斯難、御和讃にあらう。

三本の
指が折
れるか

一代諸教の信よりも

弘願の信樂なをかたし

難中之難とときたまひ

無過此難とのべたまふ

あふものはござりません、たいあるものは掴まへ所が無い、之はござりしやうと出て貰ひたい。今迄十九願と二十願とは此の機一つになるまでにさせて貰ふ方便の本願ぢやぞ。これは京都邊の同行は知らんが尾張邊に行くとかういふ風になつて居る。南無阿彌陀佛の我をたのめば必ず助けるといふ勅命はごこへ聴くかといふと後生一つに持ちかねとほした腹底に聴く、之は子供でも云つて居る。宿善開發の機といふのは此の機の事をいふ。之を後生大事の機といふ。

自分
でな
る
始末
を
か
つ
け
る
力

自力とは自分の力、他力とは他の力。自力とはどういふ事かといふと、今出かけて行かんならんとなると行く先が明かでない、眞つ暗がり、之を自分で始末をつけるから自力といふ。此の機は凡夫ぢやでどうもならん、と自分で始末をつける、此の機眺めてはならん自分で始末をつける、自力は十九、二十。第十八願の他力は我手で始末がつかん事になつて阿彌陀様に始末をつけて貰ふから他力。此の眞宗でいふのは法から來るのでない機から來る。十九願を自力といひ二十願

を自力といふのはどこでいふかといふと自分で始末をつける、十九願は、此の機は凡夫ぢやで煩惱に眼障へられて居るで、まつくらがり、後生となつたら明かでないのが當り前、と自分で始末をつける。又二十願は此の機を眺めてはならぬと自分で片付ける。所が我手で始末がつかんがどうしよう、我にまかせよ、我をたのめよ、はそこに出て來た。他力とは阿彌陀様に始末をつけて貰ふ。そこで後生助けたまへがわかる。之を後生大事の念ひの宿善といふ。

六 私が始終いふが、眞宗では御淨土參りを自分の手許に握らうと思つたら駄目握られる筈は無い、お淨土と此の心と向き合ひになつたら五十二段違ふ。解る道理は無い。阿彌陀様はどれ程思つてもあかん、見えもせず知れもせず解りもせんものならどうしませう、それは無明業障の恐ろしき病を持つて居るから、そんなことは何ぼう、やつても氣張つても力んでもあかぬ。まつくらがりだらう、まつくらがりて困りました、困つたら、そこを受持つために俺が五劫永劫かゝつ

無明業
障の恐
ろしい
病

た、我にまかせよ、うまい事になつて居るは。たゞのたいとはこの事だ。

そこでどうするかといふと今度は墮ちる機がお助けにあひ、たのむ機がお助けにあふ。墮ちる機はお助け、たのむ機はお助けといふ二つがある。

落ちる
お助け
お浄け
は込へ
違む
は違ふ

之はお前さん平生の聴聞と、私の今の話と違ふ所があらうから、それを一返聞いて貰はんならん。南無阿彌陀佛の六字でいふと、墮ちる機はお助けは南無の二字の事、たのむ機はお助けは阿彌陀佛の四つの字の事。墮ちる機はお助けは、墮ちるなりのお助けといふことで、御浄土へ連れ込む事と違ふ。墮ちる機はお助け、たのむ機はお助けは命終つてからと思ふたら違ふ、命終らんたつた今阿彌陀さんが引受ける事、受持つ事、受取る事。さうして今度は墮ちん機に轉じ變る事を南無といふ。其の南無となつた機、たのむ機になつた機を其のまゝ娑婆五十年護りづめに護つて下さる。これは八十通を讀むと直ぐ解る。墮ちる機がお助けにあつて墮ちん機に轉じ變つた機の事を正定聚の南無の機といふ。

落ちる
機を出
せ樂に
なる

七そこで第十八願の宿善は、愈後生となつたら聴いた事も用には立たず、覺えた事も間に合はず知つた事も役には立たぬ、サアと踏み出しや眞つ暗がり、參らせて貰ふと承知せん、裏からいへば墮ち相な、こゝに南無が要る。それは心配するな、どうしませう、墮ちると知つたらそこ受持たう、參れんと解つたらそこ引受けやう、南無ぢやぞ。聴いた事も用には立たず覺えた事も間に合はず、知つた事も役には立たぬ、サアと踏み出しや何にもない、聴かん昔も聴いた今も同じ事。何十年聴聞したやら年數は解らねども、聴いて役立つものとは何んにもござりません、今と踏み出しや方角なしの眞暗がり、これより他にはござりません。墮ちる機を出いたのぢやぞ。久遠劫來より三惡道を経廻るうちに欲しや憎や可愛やとやつて來た煩惱のかたまりが、我が手で始まつけたくば三僧祇百大劫の修行、我が手で始末がつかんと解つたら、受取る事を工夫した間が五劫、受取資本が兆載不可思議永劫の間かゝつて出來た、我に渡せよと、呼んで下さる。

一番奥
てを出し

我にまかせ我に渡せといふ事は墮ちる機を受取るお助け、受持つお助け、引受けのお助け、私の心の一番奥を出て見たら、愈後生と踏み出しや何にも安心はござりません、表からいへば參れ相にない、裏からいへば墮ち相なよりございませぬ、それでよし〜と來た、うまい理窟ぢやネー。

行場持
たすの

生れついたる生地のみ、ありべがりの其のまんま墮ちる實機の其のまんまを受取るために俺は五劫永劫かゝつたのぢやぞ。たゞかいナ、たゞぢやぞよ、之を雜行すて、後生助けたまへといふ。然らば私はどうしやう、どうする事も要らぬ、どう思ふ事も要らん、どうなるかうなるの世話はやめぢやぞよ。生れついたる生地のみ、ありべがりのそのまゝ墮ちる實機の其のまんまを受取るために五劫永劫ばかりで無い、十劫以來待ちかねて居る親にまかせ。この所を聴き損なつたらいつまで経つてもらちがあかん。其方の手許の出し物は、今日の日暮しなら、欲しい憎い可愛い、後生となつたら行場持たすの眞つ暗がり、それを出して

行場持
たすの
眞暗

見い樂になる。

彌陀成佛のこのかたは

いまに十劫をへたまへり

法身の光輪きはもなく

世の盲冥をてらすなり

誰でも知つた御和讃 阿彌陀さんが五劫の思案、兆載永劫の修行をして阿彌陀といふ佛になつてから今まで、十劫以來何してござる、法身の光輪きわもなく、お慈悲のお光明に極ほとりなく世の盲冥を照すなり、後生となつたら盲ぢやぞ、未來となつたら目無しぢやぞ、此の盲、目無しを受持つために俺は待ち兼ねて居る、阿彌陀様の勅命をそこに聞くといふ事を忘れてはならぬ。

後生となつたら行場持たすの其の機久遠劫來より三惡道を経廻るうちに欲しや憎や可愛やとやつて來た煩惱のかたまり、それが我が手で始末がつたれば三僧祇百大劫の修行、我手で始末がつかんと解つたら、それを受持つために十劫以來、坐る暇なく立ち乍ら、まかせよ、たのめよ、と呼び通しに喚んで下さる。

も要らるるごうす

事柄は解つたか、南無は受持つ事、引受ける事、我にまかせ、我のため、其方の方は墮ちん世話も参る世話も何にも要らぬ、暗やみのわからん所は此の彌陀が受持つてやる程に、そつちや向かんと置け、然らば私はどうせう、——南無ぢやぞ——どうすることも要らん、引受けて受持つ親は、たい受持つといふのぢや無い、受持ち模様は、我能く汝を護らん。守りづめに護つて離れはせん。どの位離れんか、正覺の命がけ、萬が一も墮いたら、其方一人はやりやせんで、此の彌陀もともに焰の中迄も、行つてやる、そこで其方の方はどうなる事もいらん、どうせる事もいらん、然らば其方の心の落着きは、其方の心の安心は、離れん親をば當てにするばつかし、付添ふ彌陀を力にするばつかし、親と一緒なら来る氣になるばつかし、親か命懸けで離れんといふ親切に落ら着け、我をたのめよと喚んで下さるのぢやぞよ。

疑晴れて

八　そこで能機の受手前、南無といふは衆生が阿彌陀如來に向ひ奉つて雜行す

助かる

て、後生助け給へたのむ機の方なり、雜行すて、後生たすけたまへとはどういふ事か、といふと、そんな事か、といけ、そんな事とは知りませなんだ、只今までは信心貰うて、疑ひはれて、これなら参らせて貰へると落着いて、安心してからでなければ助けて貰へんかのやうに思つて居りました。只今迄は、御慈悲を聽いて御親切聞いて、疑晴れて、信じて夜明けして落着いて安心して大丈夫とならなげりや助けて貰へんかのやうに思つて居つたで、愈後生と踏み出すと、ごごとなう、なんとなうで、長い間此の機一つに困りました。人にはいへず自分だけで困つて居る奴、人の前では信者顔をして内密で困つて居る奴。難しい話ぢや、親子兄弟夫婦の間もかくして、かくしづめ、其のうちには貰へるぢやらう、其のうちには戴けるぢやらう、と長い間此の機一つに困りました。あなたの勅命承はれば、まるで反對、疑晴れて、信じて、夜明けして、参らせて貰へるとなつて御助ひにあふのぢや無い、参れるとなれん、行けるとなれん、大丈夫と思へ

ぬ此の機を受持つ親であつたのぢやな、と彌陀に向へ。

こんな機受持つ親とは存じませなんだ——親子名のりをするのぢやぞ——只今迄は信心貫うて疑晴れて、これなら大丈夫と落着いてこれなら參らせて貰ふと坐りをつけてそれから御助けにあづかるのぢやと思つて居つたで、自分の機をおさへて、なれんがくくとなが——い間、此の機一つに泣きました。あなたの勅命承はりや、泣くのぢやなかつた、なれん此の機を受持つ親があつたのぢやな、此の機受持つ親がましますのなら、此の機引受ける親がましますのなら——雜行するといふ所する、さし置く、省す、ボンとやる所、おしいけれども渡す所、長い間迷のもとつた奴を今彌陀に渡す所——只今からは、行ける行けるの世話やめ、參れる參れんの世話やめ、墮ちる墮ちん、助かる助からんの世話はやめて、今日からは、此の機はどうあらうが、かうあらうが用事が無いのぢやな、とすてるのぢやぞよ。

捨る、
さし置
く、
省
みす

此の機受持つてお呉れる親がましますのなら、此の機引受ける親がましますのなら只今から確かにあらうが無からうがしつかりあらうが無からうが、行け相にあらうが無からうが、參れ相にあらうが無からうが、自分で行くのぢや無いで、親が命がけでも引受けて護つて連れて行つてお呉れるで、只今から此の機には關係なくともよかつたのぢやなとすてるのぢやぞよ。はからひのやんだ自力のすたつた、我機の方に目のつかん所ぢや。